



Title	Exiles と Zee & Co-その構造とテーマ-
Author(s)	田代, 幸造
Citation	明治大学教養論集, 107: 16-35
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8806">http://hdl.handle.net/10291/8806</a>
Rights	
Issue Date	1976-02-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# Exiles と Zee & Co

—その構造とテーマ—

田代幸造

## I

Edna O'Brien は愛を執拗に追求している作家である。特に愛における女性の心理描写には優れている。女流作家だから、と言うのはこの際妥当ではないだろう。作家が男性であれ女性であれ、われわれは作家の性別にかかわらず、作家を一個の人間として観て、その作品を分析し、検討すべきだからである。ともあれ、かの女は処女作 *The Country Girls* 以来、一貫して愛とは何か、特に女性にとってそれはどんな様相を呈し、どんな意味を持つのかを、様々な視角から捉えようとしてきているのである。

処女作 *The Country Girls* においては、作者が生まれ、育ったアイルランドの田舎を背景として、少女期の甘美な夢をそそる異性への思慕を、第二作 *Girls with Green Eyes* では、妻ある男性との love-making による少女期からの脱皮を、そして第三作 *Girls in their Married Bliss* では、結婚生活の倦怠から生じた愛と sex の分離を、些か原色のけげげさでわれわれを眩惑はするが、明快に提示したのだった。以上の三部作によって、かの女はキングズレー賞を受賞し、作家としての地位を確立した。それ以来1972年に発表された *Night* に至るまで、かの女の作品に共通して言えることは、男女間の愛において悩み、虐待され、反抗して傷つき、果ては愛と切り離された love-making にその逃避の場を求め、充たされない虚無の中にのたうちまわるのは、常

に女性である、ということだ。男性は自己愛の塊まりであり、女性に対する要求ばかりが強く、まさに“Love Object”としてしか女性を見ることができない存在である。

*Girls in their Married Bliss* において、Baba が浮気の相手から得たものは結局、妊娠という、女性にとっての最大の苦悩であり、女性にだけ負わされた神の不合理的な摂理にすぎなかったし、また *August is a Wicked Month* においては、ヒロイン Ellen が男から得たものは性病であり、これが世界中の男性から言い寄られるという妄想の果てに、性的充足を求めたかの女へのおぞましい報酬であったのだ。Baba の妊娠にしろ、Ellen の性病にしろ、愛と sex とを切り離れたときに、かの女らが男性から蒙った、と言うよりはむしろ、みずから招いた女性の永遠の受難の象徴と言えらう。

このような受難にもかかわらずかの女らは、飽くことなく sex を、そしてそれによる充足感と幸福感を求めてもがくのである。ある場合には男性を拒絶するポーズによって、またある場合には女性特有の永遠の受難を逆手にとって武器となし、またある場合には甘美な涙をもって、かの女らは男性に攻撃を仕掛けさえする。この矛盾をまともに取り上げて作品の中に表現しようとしたところに、Edna O'Brien の作品が持つ、あの原色のけげげげしさが根ざしているのである。Anthony Burgess は次のように言っている。

女性は性生活の面で男性を必要としている。けれども、その事実を認めようとはしない。女性は男性を拒絶したいと望むが、それができない。そこで、そもそも性的には、男性に支配されることによって性的満足に達し得るはずの女性が、男性を支配することを要求する。「陰」と「陽」とがすっかりからみ合い、かくして、女性のディレンマを文学的に表現するとなると、これはしばしば、<sup>(1)</sup> げげげげしく、煽情的かつ爆発的なものになる。」

*Zee & Co* もこの例に洩れるものではない。夫 Robert を Stella から奪い戻そうとする Zee の斗いは激しく、執拗であり、男性 Robert とのそれは、

「煽情的かつ爆発的」であり、悲劇的ですらある。ある時は強迫的に、またある時は懇願的に、それは展開される。

## II

Zee と Robert との夫婦関係は、この作品の冒頭において象徴的に暗示される。物語は彼ら夫婦のテーブルテニスのトーナメントにおける最終試合で Zee が勝利を収めたところで始まる。「何がもらえるの？ 戦利品は？」と、意気軒昂たる Zee に対して、Robert は「口もきかず、ほとんど悲しんでさえている」<sup>(3)</sup>のだ。

ゲームの結果は人を勝者と敗者とに明確に分けへだて、勝敗は決して交わることはあり得ない。その反面、ゲームに参加した当事者同志を奇妙に惹きつける作用も時としてあり得るといふ矛盾した性格を合わせ持つのがゲームである。Zee と Robert の夫婦関係も、このような性質のものであることを、作者は物語の冒頭でテーブルテニスのイメージをもって象徴しているのである。

そもそも夫婦関係の成立と維持の要件は、当事者間の愛である。しかるに勝ち誇っている Zee の態度と、「口もきかず、ほとんど悲しんでさえている」Robert の間に、この要件は存在するのであろうか。われわれは危惧の念を懐かざるを得ない。というのは、ゲームを終えた彼らは、Gladys の主催するパーティに出席するための服装のごとき些細な事からに関してさえ意見が合わず、諍いをするからである。このようにして作者は巧みに彼ら夫婦の間に存在する亀裂を明らかにしてゆき、ついには Robert をして次のように Stella に告白せしめている。

ぼくたちはハネムーンの間じゅう喧嘩をしていたんだ。頭をひどく打って、気分が悪くなったこともあるほどなんだ。喧嘩ばかりしていたもんだから、ぼくたちの上下、両隣りの部屋の連中は、ぼくたちが退去させられはしまいかと、尋いたほどだったんだ。<sup>(4)</sup>

彼らの確執はかくも激しく、彼らの間にはもともと愛などはなかった、と言ってもいいだろう。Robert の結婚の動機は「結婚によって、Zee に基盤を作<sup>(5)</sup>ってやろうと思った」からである。それは単なる同情にすぎない。同情は時として、愛へと進むこともあるが、逆に相手がおのれの意に従わない場合には、恩を施してやったのに、という気持に変わり、やがては嫌悪の情へと容易に移行することもある。ハネムーン以来、喧嘩の絶えない夫婦の間に亀裂が生じるのは当然であり、まして結婚の動機が同情にあった場合には、この亀裂は容易に生じ、しかも埋めるべくもない深く大きなものとなるのは火を見るよりも明らかである。彼らのフラットはたとえ超近代的なものではあっても、「二人用の小さなテーブルはあるが、それは通常の食卓ではなく、ほんの小さな間に合わせのものである<sup>(6)</sup>」という彼らの部屋の内部が、象徴的ではあるが雄弁に彼ら夫婦の関係を物語っている。

Zee の母親は、Zee がまだ幼い少女だった頃、すでに三度目の結婚をし、しかもかの女が11~12才頃にプールサイドで転んで怪我をしたときに、母親はその時の恋人にむかって「Zee は始めて恋の痛みを知ったのよ<sup>(7)</sup>」と、平然と嘯く女性であった。こうしてかの女にとって父親は何度となく変わったのである。このような環境の中で、このような母親に育てられた Zee に、平常の家庭的な感覚、夫婦間の平常の愛が芽ばえなかったからといって、Zee だけを責めるわけにはゆくまい。このようなかの女にとって、独立心と、一度擱んだ仕合わせは決して離そうとしない執拗な、激しい気性は、女として生きてゆくための必要条件だったのだ。Robert の友人からの一枚の紹介状をたよりに、当時 Robert が数人の友人と起居を共にしていたフラットに、独りでケニヤからロンドンに出て来て起居を共にすることができたのも、このような彼女の性格によるものである。このようにしてかの女がようやく擱んだ、女としての仕合わせが Robert との結婚であったのだ。それは人並みの仕合わせも知らず、人並みの暖かい家庭の味も知らなかった少女時代からの喜ばしい訣別であったはずのものである。かの女自身、Robert に「家庭的になるって、すばらしいことね<sup>(8)</sup>」と、喧嘩のあとでしみじみと述懐しているが、異常な家庭に育ったからこそ、

かの女の、平和で幸福な家庭への憧憬は強く激しいものである。

Robert とでもこの思いは同じであった。Gladys のパーティで知り合った Stella という未亡人と急速に恋に陥り、果ては Zee との離婚を決意して、Stella と新居を構えようとするほどまでになったのも、彼が子どもの居る Stella の平和な家庭に惹かれたからである。彼は Stella に次のように述懐している。

「はじめは、きみを愛するようになるなどとは思っていなかった。ほんの火遊びのつもりだったんだ。少し身勝手だが、男なら誰でも望むことなんだ。だがきみを愛するようになってしまった。知りたければ正確に言うが、あの晩のことだった。きみの子どもたちと過したあの晩のことだったんだ。ぼくは家庭というものに惹かれたんだよ。家に帰ったような、とうとう着いた、という気がしたんだ。そういうことだったんだよ。そしてそれは今も続いている。その他のものはみんな、ぼくの人生も、かの女の人生も、ガラクタばかりなんだ。そんなものは欲しくないんだが、身についてしまっているんだ。」<sup>(9)</sup>

家庭への志向という点では、Robert も Zee も同じであるが、二人とも互いに相手を支配することを望むところに不和が始まり、心ならずも家庭の破壊を導いたのである。

Zee にとって Robert との結婚は、生まれて始めて掴んだ、女としての仕合わせであり、無意識ながら憧れていた家庭というものを、みずからの手によって築く喜びでもあった。だが、太陽のごとき激情と、猫のごとき執念深い性格の持ち主であるかの女にとって、男性の支配を受けるということは耐え難いことであった。と同時に Robert によってしか、かの女は家庭を築き、女としての仕合わせをわが手に取めることは出来ないのである。したがって Robert を失なうということは、かの女にとってはまさに、女であることを停止することであり、それは生きながらの死を意味する以外の何ものでもないのだ。ここに Anthony Burgess の言うディレンマがあるのであり、かの女を苦悩のどん底

に引きずり込む要因があると言える。つまりかの女にとって愛とは、相手を完全に所有することであったのだ。それは相手を、おのれの支配下に置くような完全勝利に他ならないのである。物語冒頭のテーブルテニスの場がこのことを如実に象徴している。

一方、Robert のそれは飽くまでも男性支配のものであり、男性に慰安を提供してくれる家庭的な女性のみが、彼の愛の対象たる資格を持つのである。Zee も Robert も共に家庭への志向を持ちながら、その目指すところはまさに正反対のものであり、それらに基づく二人の愛が一致するはずはなく、彼らの闘いは激しいものにならざるを得ない。そしてテーブルテニスに見られるように、勝敗が決定的となったとき、おのれの愛を実現することのできない Robert は、それを実現してくれる Stella の許へ走らざるを得ないのであり、Zee はおのれの戦利品を失うまいと、懸命の努力をし、おのれの手からそれを奪い盗ろうとする者に対しては、闘いを挑まざるを得ないのである。その闘いは激しく、執拗で、陰湿であり、ときには醜悪でさえあるのも、かの女が追い込まれたディレンマの深さが故である。それはまた、かの女が女性であろうとする、換言すれば、生命を賭けての極限の闘いだからである。

### III

James Joyce の *Exiles* 中の Robert Hand に、Zee と Robert の懐く、完全所有による愛の達成の、より耽美的なすがたをわれわれは見ることができる。(以下、この章で Robert と呼ばれる人物はすべて、*Exiles* 中の Robert Hand のことである。)

Robert は自分と Bertha との仲が、実は Richard に逐一知られていたことを知ったときに、次のように言う。多分に自己弁護的な要素がこめられているとはいえ、彼の言葉には、おのれの愛の真実であることを主張する気持が溢れていることがわかる。

たとえば、この石だが、これは極めて冷たく、つやつやしており、繊細

で、まるで女性のこめかみのようだ。これはものをしゃべらず、男の情熱に耐えるものだ。そしてきれいだ。だからきれいなが故にぼくは、この石に接吻するのだ。そして女性とは一体何なのだ？ 石や花や小鳥と同じように自然の作品じゃないのか。接吻は忠誠を示す行為なのだ。<sup>(10)</sup>

続いて、女性のどんな点に惹かれるのかについて次のように言う。

かの女が持っていて、他の女が持っていない、というようなものじゃなくて、かの女が他の女と共通に持っているものに（惹かれるのだ）。つまり、もっともありふれたものに、な。<sup>(11)</sup>

彼の意味しているものは、明らかに女性の肉体である。彼にとって女性の魅力とは肉体の美しさでしかないのだ。だからこそ従妹で、婚約者でもある *Beatrice* の優れた知的な面には目もくれず、知性の面でも、教育の点でも、育ちから言ってもかの女に劣ってはいるが、肉体的な魅力においては優っている *Bertha* の方に、彼の心は傾いているのである。

美への熱情こそが、彼の行動原理である。美しきものへの憧れが強きが故に、美しきものへの所有欲も強くなるのである。彼の場合には、それが女性の肉体の所有へと直結するのは、理の当然である。「自分が愛する女性を所有したいと思わない男などは、この世に存在しなかったのだ。ぼくの言う所有とは、肉体の所有のことなんだ。それが自然の法則というやつなんだよ。」<sup>(12)</sup> と、彼は言う。自然の法則の前には人為的な法則などはあって無きに等しい。*Bertha* が人妻、それも学友である *Richard* の妻であるという立場などは、彼には問題ではない。重要なことは、*Bertha* をわがものとして肉体的に所有することである。この意味で、*Robert* は、社会の *order* と *convention* に反抗的である、と言うことができよう。

社会の *order* と *convention* に反抗的であるという点で、さらに徹底しているのが、実は *Richard* である。彼が、社会的かつ宗教的 *convention* に凝



り固まっている母親の意に反して、Rowan 家にふさわしくない育ちと教育しか持ち合わせていない Bertha と、イタリーに駆け落ちしたことが、まず何よりも雄弁に彼の反逆の意志をあらわしている。Robert の口を通して語られる「奴隷の言う人生の悲惨さから逃れ得る唯ひとつの門、それは盲目的な激情の瞬間である」<sup>(13)</sup>という信条を身をもって実行したのだった。しかし Richard は作家である。作品を創造しなければならない。肉体的にいかにも魅力を持っているようにも、Bertha は知的創造活動の援けにはならない。彼が創作の際インスピレーションを得たのは、もっぱら知的に優れた Beatrice からであった。Beatrice は Bertha に欠けているところを補ってくれたのである。かくしてかの女は Richard にとって、なくてはならない存在となる。しかしかの女の知性にも限界はある。Richard はそれを、かの女が全的に献身しないせいであると言って、かの女に不平を言う。婚約者である Robert からは肉体的に拒否され、知的伴侶になりかけた Richard にも充分について行けないかの女は、肉体的にも、知性的（精神的）にも不毛な霊的存在でしかあり得ないのだ。

Richard の、社会の order と convention への反逆はこれだけにとどまるものではなかった。それは、自分との間に一子 Archie までもうけた Bertha を、学友の Robert に与えようとする試みとしてあらわれている。しかも彼ら二人の間に起きた出来ごとを逐一 Bertha に報告させるという念の入りようである。ここまでくると、われわれは、彼にマゾキスティックな性格が内在しているはしまいかという疑念を懐かざるを得ない。が、ともかく、Bertha は、夫が自分に Robert との逢引きを余りに強く勧めるので、それは彼が Beatrice を愛しているために、かの女に自分が逢う機会を作るのが目的ではないのかと疑いながらも、彼の言うがままに、Robert との逢う瀬を重ねる。「夫のためにすべてを棄て去ったのでした。宗教も、家族も、わたし自身の平和も」<sup>(14)</sup>と言うかの女に、他に取るべき方法があるだろうか。すべてを棄て去って肉体しか残されなかったかの女にとって、Richard の愛をつなぎとめて置くには、彼の言うがままにならざるを得ないではないか。かの女にとって愛とは、所有され、支配されることに他ならないのである。

ここで重要なことは、なぜ Richard が Bertha を Robert に与えようとしたのか、ということである。それは社会の order と convention に対する単なる、反逆のポーズにすぎなかったのだろうか。われわれはここで、彼の愛について検討をする必要がある。

彼が Bertha を伴ってイタリーへの逃避行を敢行したのは、確かに Robert の信じる「奴隷の言う人生の悲惨さから逃れ得るひとつの門である、盲目的な激情の瞬間」によるものであったろう。だが九年間の逃避行は彼を大きく変えないはずはなかった。なる程、彼は Bertha からかの女のすべてを受け取り、満足したかも知れない。しかし作家である彼は知的産物である作品を創造する過程において、個人の自由（この場合には魂の自由と言ってもいい）というものが、いかに重要なものであるかを、身をもって経験せざるを得なかったろう。作者 Joyce が言うように、「魂にも肉体と同じように処女性というものがあるのかも知れない。女性にとっては、それを与えること、男性にとっては、それを受け取ること、それが愛という行為である<sup>(15)</sup>」とするならば、Richard と Bertha の間にも愛の完成が存在したことは事実である。しかしその結果、彼の得たものは何だったろうか。それは魂の自由ではなくして、愛の絆という束縛に他ならなかったのだ。魂の自由のないところに創造はあり得ない。だからこそ彼はイタリー滞在中に、Beatrice の手紙からのインスピレーションを必要としたのではなかったのか（このことが彼をして、精神的には Beatrice の方に傾斜せしめた原因にもなった）。ともあれ、彼はこのような体験を経て、真の愛とは、おのれが愛する者を所有することではあっても、その所有の仕方が Robert の場合とは異なるものであることを悟ったのだ。

彼はわが子 Archie に対して、物を所有するということはどういうことであるのかを、次のように説明する。

お前がなにかを持っている間は、奪い盗られることもあるのだ。……でも、お前がそれを他人に呉れてやると、それは与えてしまった、ということになるのだ。泥棒も、もうお前からそれを奪い盗ることはできなくなる。つまり

お前が与えてしまったその時に、それは永久にお前のものとなるのだ。いつもお前のものとなるんだよ。それが与えるということなのだ。<sup>(16)</sup>」

与えてしまうことによって永久に所有するとは、まさに逆説的な所有の仕方であり、非所有による所有とでも言うべきものだろう。ともあれ、これを Richard—Bertha—Robert の関係について言うならば、それは次の Richard の言葉に要約できるであろう。

それ (Robert が Bertha を奪い盗る、と言ったこと——筆者注) は、ぼくが今までに何度も聞いてはいるが、信じたことのない言葉だ。こっそりと、ということなのかね？ それとも暴力を用いて、ということなのかね？ ぼくの家で、きみは何も盗むことなんかできはしないよ、ドアが開いているのだからね。抵抗のないところで暴力を用いるわけにもゆくまい。<sup>(17)</sup>

Richard が Bertha に、Robert との逢引きを認めたのは、上のような彼の所有についての信念から出たものであり、結果的に anti-conventional になったのである、とすることができよう。彼にとっての愛とは、相手を完全に所有することではあるが、その所有によって完全な自由と独立を相手に認めることであるのだ。だが彼が Bertha に対して完全な自由を与えたと思っているときに、はたして Bertha は完全に自由だったろうか。

「宗教も、家族も、わたし自身の平和も」捧げてしまった Bertha にとって、完全な自由とは一体何を意味しただろう。そんなものはすでにかの女には存在し得るはずのものではないのだ。ただ Richard がそのことに気がついていないだけである。かの女にとって残されている唯一の道は、Richard の意志に従うことだけである。だからこそ Robert との間に起きた出来ごとを逐一報告するように求められたときに、この奇妙な、anti-conventional な要求に、かの女は従わざるを得なかったのではないのか。「今度の出来ごとで馬鹿でない人間はたった一人いるだけだわ。それがあなたなのよ。わたしも、彼(Robert

——筆者注)も馬鹿なのよ……わたしはあなたの道具にすぎないのだわ<sup>(18)</sup>』と、怒りをぶちまけながらも、かの女は Richard を捨てて Robert のもとにはしることは出来なかったのである。その上 Robert も「ぼくの負けだ。きみが始めてかの女に会った九年前と同じように、かの女は今もきみのものだ<sup>(19)</sup>』と、言わざるを得なかったところに、われわれは Richard の Bertha に対する強力な絆を感じないわけにはゆかない。

*Exiles* は、以上四人の人物が複雑にからみ合い、晦渋なドラマを構成し、精神的な面と肉体的な面の両面から、愛とは何かを追求したドラマであると言うこともできよう。これら四人の関係を明快に示してくれた図式の例として、次に S. R. Brivic の考察を要約してみよう。<sup>(20)</sup>

彼は、これら四人の関係を moral scheme と natural scheme の二つに分けて考察している。彼によれば、前者は Richard—Bertha connexion と、Robert—Beatrice connexion との二つの connexions の対立であり、後者は Richard—Beatrice connexion と Robert—Bertha connexion との対立である。

Richard は作家として知的産物を創造し、Berthe は妻として Archie を生んだという点で Richard—Bertha connexion は creative であるの対して、Robert は婚約者の Beatrice を捨てて友人の妻を盗ろうとしたし、Beatrice はたとえ、Richard に創作のインスピレーションを与えることはあっても、みずからは何も生み出すことができない上に、結果的には Richard を誘惑したことになり、したがって Robert—Beatrice connexion は non-creative で devouring (or destructive) な connexion である。

また natural scheme としての Richard—Beatrice connexion は、Richard は肉体的には、弱く、unselfish であるが、知的(精神的)創造にたずさわり、魂の自由を尊重する(少なくとも彼自身の論理の上では、という条件つきではあるが)という点において spiritual であり、Beatrice は肉体的魅力に乏しいが、Richard にとっては Bertha の持っていない知的(精神的)な面を補足してくれる、という点において Richard と同じように spiritual な存在である。また Robert は女性の肉体の美の賛美者であり、それをわがものとしたい願望

を懐いているが故に、彼は physical な存在であり、Bertha は、その肉体美の所有者であるという点においてまさに physical な存在である。したがって natural scheme においては、Richard—Beatrice connexion が表象する spiritual と、Robert—Bertha connexion が表象する physical との対立を示している。

そしてもし *Exiles* が、physical なものと、spiritual なものとの結合による真の愛の誕生のドラマであるとするならば、それは Richard—Bertha connexion に見られるような、spiritual な存在と physical な存在の結合において達成されるものである。その結合は、それぞれの機能において creative であるからだ。

以上が S. R. Brivic の図式の要約であるが、ここで再び *Zee & Co* における愛のすがたを、この図式を参照しながら検討してみよう。

#### IV

*Exiles* における S. R. Brivic の図式を、*Zee & Co* にそのまま適用すると、moral scheme としては Robert B.—Zee connexion (以下 *Exiles* における Robert と *Zee & Co* における Robert とを区別するために、それぞれの姓である Hand と Blakeley の頭文字を名前の後に付けることにする) であり、natural scheme としては Robert B.—Stella connexion である。

Robert B.—Zee connexion における愛の様相はすでに前に述べたところである。彼らにとっては、互いに相手を支配する (*Exiles* における Robert 流の表現を借りれば、相手を完全に所有する) ことが愛であるが、Zee の場合には所有 (つまり支配) されることがその性の本来のすがたであるが故に、Robert B. よりも一層深刻な、悲劇的な闘いとならざるを得ないのであった。

Robert B. と Stella が山小屋を借りて数日を二人だけで過ごした時に彼らは言う。

Robert B. 「まず、どちらをお好みだね、男の子？ それとも女の子？」

Stella 「両方よ。」

Robert B. 「きみなら両方とも持てるさ。」<sup>(21)</sup>

この会話から、少なくとも Robert B. は肉体的には creative であることがわかる。一方 Zee は自動車事故に会い、「子宮やその他いろんなものを切除された」<sup>(22)</sup> のだった。つまりかの女は肉体的にはまったく non-creative である。Richard—Bertha connexion の場合には、spiritual な面では Richard が、そして physical な面では Bertha が、それぞれ creative であるために、彼らの connexion は creative connexion と規定されたが、Robert B.—Zee connexion では non-creative であり、その点においては Robert H.—Beatrice connexion の non-creative に応じるものである。

さらに Robert B. の夢にはよく狼があらわれる。

Zee 「あなたはよく狼の夢を見たものでしたね。狼がわたしの夢を見ていると、あなたは言ったわね。」

Robert B. 「ああ、そうだ。どこでもない真中でね。」

Zee 「狼とあなたは一度も遇ったことはなかったわね。」

Robert B. 「間髪之差で、いつもぼくたちはすれ違ったってわけさ。だが、ぼくたちはきっと遇うよ。それが大事な点であり、夢の意味なのだよ。」<sup>(23)</sup>

Robert B. が狼の夢を見ながら「いつもすれ違った」とは、彼に destructive な、devouring な力が潜在していることを物語るものであるとすると、「ぼくたちはきっと遇う」ことになるとは、潜在的なこの力がいつかは爆発的に表面にあらわれることの予感を示すものであり、その爆発が、現在 Stella との恋にはしり、Zee との家庭生活を破壊しようと作用していることを示すものである。この意味で Robert B. は non-creative であるばかりでなく、destructive であり、Robert H. に通じる人物である。

さらに「狼がわたしの夢を見ている」という言葉は、明らかに Zee が狼に

所有されることであり、それはとりもなおさず、かの女が Robert B. の destructive な力に屈することであって、Robert B. の切ない願望であったのだ。ここに Robert B. の愛の認識が Robert H. のそれとまったく同一であることを、われわれは知るのである。

だが、すでに観たように Robert B. の愛は、Zee を対象とする限りは完成されるべくもない。Zee は彼の愛を受け入れる（否、彼の愛に屈するという方が良いのかも知れない）べく余りにも強烈な自我を持っているからである。かの女の自我の強さは、太陽への指向のイメージであらわされている。（たとえば、「わたしは冬になるといつも南に行きますのよ。わたしには太陽が必要な<sup>(24)</sup>のね。わたしって、そういう種類の人間なんですわ。」及び、「Zee は少なくとも、ここからは出てゆくだろう。太陽の輝くところに住むようになるだろう。彼女は太陽が好きなんだ。」<sup>(25)</sup>——下点は筆者注）太陽の強烈な熱と光は、みずから燃えて他を焼き尽くさずにはおかない。かの女の愛（それは Robert B. を完全に所有することであるが）は、太陽のごとく強烈であればあるほど、Robert B. との確執は激しさを増し、彼を自分から奪おうとする Stella への憎悪は深まり、ついには Stella を轢き殺そうとさえするに至り、それが失敗に帰すると、みずからの命を絶とうと試みるのである。かの女もまたこの意味では destructive であり、「情熱の衝動の前には、人間の作ったどんな法律も不可侵ではない<sup>(26)</sup>」という Robert H. そのものである。

以上のように観てくると、Robert B. も Zee も共に Robert H. そのものであり、彼らの connexion が肉体的には non-creative であるばかりでなく、社会の order と convention に対しては destructive であると言うことができる。Robert B.—Zee connexion が Richard—Bertha connexion に対峙し、同時にその質においては Robert H.—Beatrice connexion に相応ずる由因である。

また彼らの connexion が physical な面が強調されている点においては、Robert H.—Bertha connexion の physical connexion に応じるものである。すなわち、Robert B. の場合には、それが狼やゴリラ（彼はゴリラの真似が巧みで、よく Zee をおどかしたものだ、p. 93）への連想として、Zee の場

合には、猫への異常な嗜好 (p. 17及び p. 121—p. 122) として、また始めて Stella の店を訪れたときに着用していた服は、「豹の毛皮のスーツ」であり、店の中の「空気を鼻をヒクヒクさせながら嗅ぎまわる」(p. 24) のであり、結婚前にはよく動物園に行ったものだったという、いずれも動物のイメージとの関連でかれらの行動の特徴が表現されているが、これは明らかにかれらの physical な面を強調しているものである。

Stella の店は「幾分寺院に似ていて、東洋風な服、長いローブ、刺繍がほどこされていて、その刺繍の間に小さな鏡がついているクッション、チャイムのように鳴る貝がら、モビール、積み重ねられた異国風の布、長い寝椅子、ひとつひとつの椅子にかけられてあるショール、壁には、ビーズ、マスク、骨董品<sup>(27)</sup>」といった具合であり、その上、「かの女の部屋は魅力的で、ローズウッドの家具、宗教的なつづれ織り、暖炉がある。それは古風な趣を帯びており、超近代的な Blakeley の家とは対照的である。」<sup>(28)</sup>さらにかの女は「料理がお手のもの」<sup>(29)</sup>であり、「(気分を落ち着かせるために) わめくわ」<sup>(30)</sup>という Zee に対して、「わたし、気分を落ち着かせるために料理するの」<sup>(30)</sup>というように、家庭への指向を持ちながら破壊的とならざるを得ない Zee とはことごとく対照的であり、かの女は家庭を守り維持する conventional なタイプの女性である (この点に Robert B. が惹かれたことは、すでに述べたところである)。Robert B. の「太陽の輝くところに連れて行こう」という誘いに対して「わたし、病人じゃなくてよ」<sup>(31)</sup>と言って断わるかの女には、Zee の持つ激しさはないが、猫が大嫌いなことで象徴されているごとく、陰湿な執拗さもないのである。かの女は死んだ夫との間に双子をもうけ、Robert B. に対して、「わたしたちはまるで一心同体でしたわ」<sup>(32)</sup>と、はばかりことなく亡夫との愛を公言できるのである。つまりかの女は Zee とは対照的な女性であり、かの女の愛は、所有することでも、所有されることでもなく、融和的な性質を持つものである。かの女の中にわれわれは、Bertha にも、もち論 Zee にもない愛のすがたを見ることが出来るのである。

S. R. Brivic の言うように、Richard は作家なるが故に作品創造という点に



において、spiritual な、creative な存在であるならば、Robert B. は建築技師であり、建造物を創作するという意味で Richard 同様、spiritual で creative な存在であり、また、双子をもうけた Stella も、Bertha と同じ意味で creative あるが故に、Robert B.—Stella connexion は Richard—Bertha connexion に応じるものであって、もし Stella が婦人服店の経営者として婦人服をデザインし、創作するという spiritual な面を強調するならば、Robert B. の spiritual な面と相俟って、かれらの connexion は spiritual な Richard—Beatrice connexion に通じるものとなる。

以上を要約すると、creative 対 non-creative の対立としての Richard—Bertha connexion と Robert H.—Beatrice connexion の対立は、そのまま Robert B.—Stella connexion のあらかず creative 対 Robert B.—Zee の non-creative の対立となり、spiritual な connexion である Richard—Beatrice 対 physical な connexion である Robert H.—Bertha の対立は、Robert B.—Stella (spiritual) 対 Robert B.—Zee (physical) の対立にそのまま移行する。

このように分析してみると、Zee & Co は、その表面にあらわれた原色的なけばけばしさにもかかわらず、その構造は *Exiles* のそれと酷似していることがわかる。

## V

*Exiles* のテーマが、作家 Richard の創作と愛の相剋であるのに対して、Zee & Co のそれは、愛そのもののディレンマであるということが出来よう。

Richard は肉体的には Bertha に惹かれながらも、おのれの精神的糧として Beatrice を所有しようとする。が、彼の所有の仕方が実に逆説的であることは、すでに観たところである。彼が Bertha に完全な自由を認めようとして、どのようなポーズをとろうとも、それは結局かの女に犠牲と献身を強いたい欲求の裏返されたあらわれであり、愛する者を全面的に所有したい願望の一変形にすぎないのである。かれ自身がそのことに気がついていないところに、このドラマの曖昧さが根ざしていると言っても過言ではないだろう。それに反して

*Zee & Co* の中心人物は Zee であり、かの女には Richard の逆説的な論理はない。たとえ Stella との一時的な仲直りのポーズを示すことがあるにせよ、Zee の Robert B. を独占しようとするための、彼と Stella の仲への邪魔だては激しく執拗である。かくして creative 対 non-creative, physical 対 spiritual の対立は、*Zee & Co* においては、より原色的なけばけばしい形であらわれざるを得ないのである。

*Exiles* の終幕は、はなはだ歯切れが悪い。Beatrice は Richard の要望に応じきれず、かれに隔靴搔痒の憾を残し、Robert H. は Bertha の拒絶に合い、その上 Archie の所有にも失敗して、おのれの敗北を認めざるを得ず、Bertha は Richard に自分の許に帰ることを懇願する。かれら三人の願望が充たされず、未解決のままなのも、いずれも Richard の意志と観念に支配されていたからである。Richard の意志と観念が、逆説的で曖昧である限り、かれら三人の充足と解決があり得ないのは当然である。Richard は、愛も友情も、家庭も宗教も、おのれの観念の犠牲に供したのだ。彼の最後の「Bertha、ぼくはもう疲れきってしまった。受けた傷のために疲れてしまったんだよ」<sup>(33)</sup>という言葉に、彼のみずから招いた孤独感と、かれが全力を挙げて闘って来た社会の order と convention に対する反逆に敗れた深く大きな傷あとを、われわれは見ることができるのである。彼に残されたものは「決して癒すことのできない深い疑惑の傷あと」<sup>(34)</sup>だけだったのだ。かくして彼ら四人は、相手のそれぞれから切り離されてさ迷う四つの魂であり、それぞれに exile なのであり、「この世の中で、知ることは決してあり得ない」<sup>(35)</sup>が故に、「知りたくもないし、信じたくもない。どうでも構わない」という深い絶望感のみが黒々と大きな口を開けているのである。

*Zee & Co* の結末は *Exiles* のそれとくらべて、かなり明快である。Robert B. と Zee 夫妻の離婚披露のパーティのあとでの、Robert B. に対する Zee の行為は、まったく一方的であり、Robert B. は翌朝目がさめて始めてそれに気がつく始末である。これはまさに愛から分離された sex の不毛の象徴に他ならない。肉体の強奪 (Zee の行為は Robert B. が酔いつぶれて昏睡状態の中

で行なわれたものであり、まさに強奪と言う以外にはない) によっては愛は充実されることも完成されることもないことを、作者 Edna O'Brien は強く訴えているかに思われる。同じ日の夕刻における、Robert B. と Zee による Stella に対する凌辱の際に、「Zee は (持って来た) バスケットの蓋を足で開け、Stella の足を小猫の頭に押しつけ」たことは、Zee の Stella に対する勝利を意味するものである。というのは、猫嫌いな Stella に強引に猫に触れさせる行為によって、おのれの意志の下にかの女を置き、さらに猫に象徴される Zee との交流の強制を意味するものだからである。それは non-creative の creative に対する勝利の象徴でもある。そして「最後に見えるのは、かれら三人の肉体一腕、頭、胴であり、それらすべてが、ひとつの完成を目指して融合している」<sup>(37)</sup>のである。つまり Robert B.—Zee connexion の愛の完成は、Stella の融合的な愛を通じてしか達成され得ないのである。いわば Stella は、かれら夫婦の愛の達成のための、単なる刺戟剤にすぎないのだ。刺戟剤によってしか完成されない愛は、しかしながら果たして creative な (肉体的にも精神的にも) 愛になり得るだろうか。ここで作者は、ロマンティックな愛の探求と、その幻滅、相手を所有しようとするエゴイスティックな愛と、それに伴う孤独とを表象しようとしたのであり、それが現代における愛の不毛である、と言いたかったのではあるまいか。

James Joyce がエゴイスティックな男性の創作と愛の相剋のすがたを通して、愛における physical な面と spiritual な面との分離を描き、それに起因する悩みと、その融合に失敗した人間の孤独な姿を描いたとするならば、Edna O'Brien もエゴイスティックな愛の中の孤独と、その不毛なすがたを描いたものである、とすることができよう。

Edna O'Brien が James Joyce の *Exiles* にどれほどの影響を受けたかは、にわかには断じ難いことではあるが、「わたしは Chekhov を読むことが出来るためにはロシア人であったなら、と思うときもあるが、Joyce を読み、理解することができるためには、アイルランド人であることの方が、はるかに嬉しいことです」<sup>(38)</sup>と、言って Joyce への傾倒を示している上に、Grace Eckley の言

うように、*The Country Girls* に *The Dead* の、*A Pagan Place* に *A Portrait* の影響が見られるとするならば、<sup>(39)</sup>*Zee & Co* 執筆の際に、Edna O'Brien の意識の中に *Exiles* があっただろうという推量もあながち牽強附会な推量ではないだろう。かの女のこの意識が、以上に述べて来た、構造とテーマの類似となってあらわれているのではないだろうか。

#### 注

*Exiles* は Jonathan Cape 版、(1950 年) の、*Zee & Co* は Penguin Books (1971 年) の、ページによる。

- (1) *The Novel Now* by Anthony Burgess, chapter 10, p. 124; Faber & Faber, 1971. 日本語訳は、『現代小説とは何か』前川祐一氏訳（竹内書店刊）による。
- (2), (3) *Zee & Co.* p. 9
- (4), (5) *ibid.* p. 22
- (6) *ibid.* p. 39
- (7) *ibid.* p. 102
- (8) *ibid.* p. 55
- (9) *ibid.* p. 120
- (10), (11) *Exiles* p. 43. Act I
- (12) *ibid.* p. 77 Act II
- (13) *ibid.* p. 89 Act II
- (14) *ibid.* p. 135 Act III
- (15) “Notes on *Exiles* of James Joyce” in “Structure and Meaning in Joyce’s *Exiles*” by S. R. Brivic. *James Joyce Quarterly*, vol. 6 No. 1 University of Tulsa, 1968
- (16) *Exiles* p. 51 Act I
- (17) *ibid.* p. 76 Act II
- (18) *ibid.* p. 95 Act II
- (19) *ibid.* p. 146 Act III
- (20) Structure and Meaning in Joyce’s *Exiles*
- (21) *Zee & Co* p. 79-80
- (22) *ibid.* p. 97
- (23) *ibid.* p. 93
- (24) *ibid.* p. 27
- (25) *ibid.* p. 90
- (26) *Exiles* p. 116 Act II
- (27) *Zee & Co* p. 24

- (28) *ibid.* p. 29
- (29) *ibid.* p. 56
- (30) *ibid.* p. 41
- (31) *ibid.* p. 71
- (32) *ibid.* p. 98
- (33), (34), (35) *Exiles* p. 154 Act III
- (36), (37) *Zee & Co* p. 127
- (38) *James Joyce Quarterly* vol. 4 No. 3
- (39) *Edna O'Brien* by Grace Eckley, p. 82; Bucknell University Press. 1974.